

Oは、他の教育実習生と情報交換する中で、自身の経験が特殊なのではなく、公立学校での一般的な姿であることを知ったという。

「…帰ってきた組がアドバイスを LINE に送ってくれていて、もう本当に 2～3 週目は 30 分も寝てないっていうことが公立の子たちだったので、何か 11 時半とかしか学校から帰れないみたいで、そこはまだ私の方が良かったんですけど…。英語が本当に、こんなレベルまで絶対いけるでしょうって思ってた、もう全く通用しないのが公立っていうのが、その反省点でも流れていて。で、ちょっと構えていたら、私は逆に全部オールイングリッシュぐらいで行ってって言われて、あ、こんなに違ったらそりゃ英語に触れる機会がないのに、例えばそれで留学だとか、この試験がいるってなると、やっぱり生徒の中でもしんどく感じてきちゃって、英語が嫌いになる人って増えるなと思ってしまって、そこもありました。」

民間企業の中でも保険の営業の仕事を選択した R は、やはり決め手になったのは教育実習であるとするが、教職自体には肯定的にコミットメントしている。

「…たった 1 ヶ月しか実習には行ってないですけど、その中でも実習だからと思うけど、生徒の心に残ることとか、僕も今でもお世話になった先生方のことを覚えてるとか、今でも連絡取って会いたいって思ったりするとか、そういう風に関われる仕事ってのはなかなかないなって思うので、そこは凄く実習で関わった中でも魅力的だと思いました。学校の先生って勉強を教えるイメージ強いんですけど、勉強だけじゃなくて、それこそ人となりだったりとか、生活の部分とか、その人の精神の軸になる部分っていうのを形作れるっていうのも魅力的です。もちろん保護者もそうですけど、保護者以外で携われるのってそういうところしかないなって思うので、大変な仕事ではあると思うんですけど、そういうところに価値があるなっていうのを感じてます。」

しかし、その一方で、根本的な限界を感じ、結局は 1 対 1 で最後まで寄り添える仕事として営業職を選んだという。

「教育実習行って、実際、学校の先生めっちゃ楽しいって思ったんですけど、それと同時に、限界みたいなところも感じて。クラスに対して、1 対 30 ぐらいになる。…（中略）…じゃあ 1 対 1 でちゃんと最後まで仕事とはいえ、最後までそういう風に寄り添えるっていう方がいいなっていうのを感じて、営業っていう道を選んでいったって感じです。」